中国語におけるテクノニミーとその実態

――日本語と比較しながら――

薛　　鳴

要　旨

本文从语义学和语用学的两个层面论述和考察汉语的从儿称谓，试图较全面地勾勒出汉语“从儿称谓”的相态。早在泰勒（E. B. Tylor）将从儿称谓的概念引入人类学之前，中国学者钱大昕就已发现亲属称谓中的“亲从子称”的现象并将其用于一些称谓的阐释。本文首先援引早年及近年的相关资料，从语义学的角度展示了初始的从儿称谓研究主要针对定型词汇中的个别行辈错位现象的解释。而从语用学的角度考察从儿称谓的现状，则是本文重点亦笔者就此探讨的初衷。其原因有二：一是中国学者在中日对比研究中，一般将日本家庭内以最小的孩子为参照点的称谓现象称作“从末子称谓”，显然由“从儿称谓”而来。二是有学者将汉语的从儿称谓视为汉语中家庭内称谓较普遍的现象，对此笔者认为有进一步探讨的余地。本文借鉴先行研究，通过问卷调查及日汉对译资料的考察，展示了当前汉语家庭内的称谓及从儿称谓的现状。

关键词：从儿称谓；语义学；语用学；家庭内称谓；问卷调查

キーワード：テクノニミー（從児称謂），意味論，語用論，家族内の呼称，実態調査

はじめに

「テクノニミー」（teknonymy）について，『文化人類学事典』では次のように記述している[1)]。

人に対する呼び方の一形式で，一般に“子ども本位の呼称法”のことをいう（“tekn” はギ

リシャ語の “tékn” ＝ child に，“-onymy” は同じく “ōnumía” ＝ name に由来する）。その代表的な型は，ある人を呼ぶときに，その人自身の個人名とか，あるいは通常の親族名称で呼ぶのではなく，その人の子や孫の中の 1 人の個人名に基づいて，「だれそれのお父さん（もしくはお母さん）」とか，「だれそれのおじいさん（またはおばあさん）」と呼ぶ方式である。

鈴木（1967）では，日本語の家族内におけるテクノニミーは，子供の名前が省略されているというよりも，「うちの」が省略されているものであるとして，親族名称の家族内という文脈でのトルコ語と日本語における使い方を比較し，次のように述べている。

「日本語では最年少の子供が使う用語を除いて，それは常に他者中心的に用いられる……，日本語に見られる他者中心的でかつ子供中心的な親族用語の使い方に対して oikonymy（ギリシア語・oikos ＝家）という新しい用語を提案する。」[2)]

しかし，この「オイコニミー」という用語はあまり知られていない。その後の氏の研究にも見られることはなく，同氏（1973）では，家族内の「最年少者」に基準を置く使い方を「第二の虚構的用法」[3)]としているが，上記鈴木の「うちの」という見方も要を得ていると言える。

一方，中国のテクノニミーについては，早くもアメリカ人類学の専門誌に馮漢驥（1936）がテクノニミーの中国の親族名称のシステムの解釈における有用性を論じ，人類学分野でよく知られるようになるきっかけを作った[4)]。それを踏まえ芮逸夫（1945）では “伯，叔，姨，舅，姑” についてさらなる検討がなされることとなった。上記『文化人類学事典』の同項の説明にも「ちなみに中国の学者は，“親従子称制”（子に従って親の呼称が決まるの意）と訳してこの語を用いている」と言及されている。鈴木（1967）でも，（E. B. Tylor よりも）「何十年も前に，ある中国の学者が古代中国の親族組織に見られる変則的な用語の使い方を説明するために，すでにこの考えを採用している」という説を，H. Y. Feng（1936）に引用している[5)]。なお，H. Y. Feng（1936）では，銭大昕（1727–1804）が “親従子称制” を用いて見事に “舅” の意味を解釈したと記述している[6)]。銭大昕『恒言録』巻三「親属称謂類」では “称妻之兄弟曰舅”（妻の兄弟を舅と言う）について，“乃後世妻之兄弟獨得舅名，蓋從其子女之称”（のちに妻の兄弟に舅という名を得たのは，子に従って称する結果である）と記述している[7)]。

そして，この概念に初めて中国語の “從児称謂” という訳語を当てたのが伍鉄平（1985）であり，H. Y. Feng（1936）から約50年ぶりにこの問題がようやく中国語親族名称研究に取り上げられたのである。実はその間前述のように，芮（1945）がすでにテクノニミーを “親

従子称”と訳しているが，残念なことにこの文献が知られていなかったということは，伍（1985）にうかがえる[8)]。

このように，H. Y. Feng（1936）や芮（1945），そして伍（1985）の論考から，中国語のテクノニミーは意味論と語用論という二つの異なるレベルのものが存在していることに気が付く。前者は定型化した親族名称の語彙であり，後者は使い方である。これまで筆者が使ってきた用語で言えば，前者は「言語形式」で，後者は「言語使用」とでもなろう[9)]。そして，後者について言うと，個人的・社会的な文脈に「場面」というコンテクストなどの要素も絡み合っているが，ここでは，それらを考慮に入れながら，日本語社会，中国語社会という通文化的アプローチを見出すことを主旨とする。日本語の場合は，上記の鈴木氏の一連の研究に代表され，また後に多くの研究で指摘され，対照研究にも引き合いとされた用法は，いずれも語用論の問題であると言えよう。本研究も詰まるところは，言語使用に焦点を当てることになるのだが，その前に中国語の“従児称謂”（teknonymy）を通時的に見ておく必要があると考え，まず定型化した言語形式から見ていくことにする。

1．定型化した“従児称謂”にみる意味論的考察

「親族名称」に対応する中国語は“親属称謂”であるが，中国語の“称謂”は実は名詞でも動詞でもある。とはいえ，“親属称謂”は名詞として定型化した「名称」のことを指すのが一般的である。一方の“従児称謂”にある“称謂”は「呼称」と「呼称する」の両方の意味を持つ。前者は「子に従った呼称」を言い，後者は「子に従って呼称する」を言う。上述した意味論と語用論のアプローチの違いはそこにあるものと考える。

H. Y. Feng（1936）の「中国語における親族名称体系の構成要素としてのテクノニミー」[10)]では，“舅，伯，叔，姑，姨”について考察し，本来それらの語の変則的な意味を説明するには，婚姻や独特な慣習など幾つもの要素から解釈せねばならないが，テクノニミーの観点からすれば，その概念一つで説明できると述べている。それを受けて，芮（1945）では古典から通時的に H. Y. Feng（1936）の論考を検証し，“親従子称”（子に従った呼称）とするよりも，“子従親称”（親に従った呼称）や“妻従夫称”（夫に従った呼称）とした方がふさわしい名称も存在するとし，“従児称謂”を発展させた考えを提起した。芮のそうした研究が見られる状況にないなか（注 8 参照），“従児称謂”のほかに，“従夫称謂”（夫に従った呼称）もあるという指摘は伍（1985）にも見られる。鈴木（1967）において「間接的な呼び方すべてを包括する」概念である「アロニミー」[11)]をここで使うとすれば，“従児称謂”（子に従った呼称）も“従夫称謂”（夫に従った呼称）もひいては“従親称謂”（親に従った呼称）もその下位概念なるものである。

以下，上記の文献を参考にしながら，定型化した中国語のテクノニミーを以下に見てみることにしよう。

1.1　各論

(1)“公公／婆婆”

現在,「夫の父／母」という意味で，言及語として用いられるが，本来“公公”は「祖父」,“婆婆”は「祖母」の意。子に従った呼称である。母方の祖父母を“外公／外婆”という呼称が現在も使われていることがその裏付けにもなろう。また，“公”が「夫の父」を意味するという古い文献の記載もあることから，“從夫称謂”ともとれるが，“從児称謂”より後の用法である[12)]。また，現代語の意味では，系譜上の関係を表す名称として必ずしも子の誕生という前提を必要としない代わりに，対称語としては使わない。

(2)“伯”，“叔”

“伯”，“叔”は，それぞれ「父親の兄」,「父親の弟」の意。現代語の口語（北方）では「夫の兄」,「夫の弟」をそれぞれ“大伯子”，“小叔子”と，接尾語の“子”を付けて言及語として使うが，南方では“大伯”，“小叔”と言及語としても対称語としても使われる。銭大昕の『恒言録』にも“夫之兄曰伯，夫之弟曰小叔”（夫の兄を伯と言い，夫の弟を小叔と言う）と説明している[13)]。この呼称に見られる世代の倒錯を H. Y. Feng（1936）では“從児称謂”と説明している。もっとも，長幼の序列を表す“伯仲季叔”の意味が古くからあったことから，“從夫称謂”とした方がより妥当であるという見方や“從親称謂”（親に従って呼称する／親に従った呼称）とする見方もある[14)]。

(3)“姨”

『現代漢語詞典』では「母親の姉妹」と「妻の姉妹」の二つの意味が記されているが，後者の場合，“大姨子”（妻の姐），“小姨子”（妻の妹）のように，接尾語の“子”が付き，言及語として用いられることは前項“大伯子”，“小叔子”に通じる。一見，“從児称謂”に見え，むしろ現代語からすればその方が理解しやすい。一方，古来，“姨”は妻の姉妹を呼称するに用いられることから，H. Y. Feng（1936）では「リバース テクノニミー」としているのを受け，芮（1945）では“反親從子称”，伍（1985）では“倒從児称謂”（逆從児称謂）として，伍はむしろ“從父称謂”（父に従って呼称する／父に従った呼称）であるとも述べる。

(4)“姑”

「父親の姉妹」の意。夫の姉妹を“大姑子”（夫の姉），“小姑子”（夫の妹）と，接尾語の

“子”を付けて，言及語として用いられる“従児称謂”になる。『現代漢語詞典』では〈書〉（“書面語”の略。「文言」の意）では「夫の母親」の意味も記載されているが，“交表婚”[15]（イトコ婚。父親の姉妹または母親の兄弟などの子と結婚する）の名残であり，夫の母親が“姑”（おば）でもある。

(5)“舅”

「母親の兄弟」の意。妻の兄弟を“大舅子”（妻の兄），“小舅子”（妻の弟）と，接尾語の“子”を付けて，言及語として用いられる“従児称謂”になる。同上辞典で“姑”同様，文言として「夫の父親」も記されるが，“交表婚”（現代中国語では“姑表”とも言うが，“姑”と“舅”は相互関係にある）で，夫の父親が“舅”でもある。ちなみに，日本語の「舅／姑」はこの時代の名残である。

1.2　考察

ある民族の親族名称からその民族の血縁関係の在り方を探ることができるというモルガンに代表される考え方に対して，親族名称と社会体系の相関関係を認めながら，親族名称を分析的類型化するアプローチも現れた[16]。ほぼ同じ時代に親族名称の間接的な使い方の発見とテクノニミーという概念の提起により，親族名称と婚姻や家族制度の関連への考察に多角な視野がもたらされることとなった。その中で，初めて世代的倒錯が見られる中国語の“伯，叔，姨，姑，舅”をテクノニミーによって説明したのがH. Y. Feng（1936）である。芮（1945）や伍（1985）で，歴史資料を辿って“従児称謂”から“従夫称謂”，“従父称謂”（“反従児称謂”，“倒従児称謂”）などの見方を生み出したのも，テクノニミーからの発展であると言える。本節の冒頭で触れた鈴木（1967）の「アロニミー」も偶然にして軌を一にする見方であろう。

中国人の“輩分”（世代）重視が親族名称からうかがえると，薛（2000）で指摘して以来，中国語親族名称の輩分重視について度々論じられてきた。しかし，通時的に見れば，前節で述べてきたように，かつては“輩”すなわち世代の倒錯や曖昧性も確かに存在していた。それを「模糊語言」[17]（ファジイ意味論）を引き合いに出した伍（1979）に見ることができ，後の氏による“従児称謂”で説明されるに至るのであった。“従児称謂”は，長い間続いた父系中心の家族制度がもたらしたものであることは，子を介した“従児称謂”にせよ，夫を介した“従夫称謂”にせよ，主に女性が使うものだったことからもうかがい知ることができよう。この現象について，夫から妻側の家族・親族への呼称は揃っていた一方，妻から夫側の家族・親族への呼称は欠けており，男女における親族名称が「不均衡」であったとし，妻は子供を介して夫とその家族・親族を呼ぶしかなかったとの指摘もある[18]。

一方，以上の何組かの親族名称はいずれも通時的に見た結果を示したものであり，その名残が定型化した名称として現代語に残っている。例えば“小叔子”などは接尾語の“子”が付き，定型化した言及語として使われる。それにより，子から「おじ」を言う名称とも呼称ともなる“叔叔”とは，形式も用法も異なるため，世代的倒錯という違和感もなくなり，“輩分”も血縁関係も名称に明確に表されているという見方に結び付いたと考えられる。

そこで，1.1に挙げた名称を芮（1945）を参考にして表1に示してみる[19]。

表1　“伯，叔，姨，姑，舅”を中心にした名称の古今対照表

関係	古代	近・現代	
		対称	他称
祖父	公（翁）	爷爷	爷爷／祖父
夫の父（妻の父）	舅（外舅）		公公（丈人，岳父）
祖母	婆	奶奶	奶奶／祖母
夫の母（妻の母）	姑（外姑）		婆婆（丈母，岳母）
父の兄	父（伯父）	伯父／大爷	
夫の兄	伯（兄伯）		（大）伯子
父の弟	父（叔父）	叔叔	
夫の弟	叔		（小）叔子
母の姉妹	母（從母）	姨，姨母	
妻の姉妹	姨		姨子
父の姉妹	姑	姑姑，姑母	
夫の姉妹	女公 女叔		姑子
母の兄弟	舅（伯，叔舅）	舅舅	
妻の兄弟	甥（妻兄弟）		舅子

古代の親族名称の「対称（語）」については判定しかねる面があるため，本論の主旨である現代語（表中の近現代）のみ「対称」（呼びかけ）と「他称」（言及）に分けた。「近現代」に限ってみると，配偶者の兄弟姉妹の名称である“伯，叔，姨，姑，舅”は，いずれも定型化した“從児称謂”の“叙称”（言及語としての他称）であることが分かる。とはいえ，それら定型化した名称は，接尾語の“子”が付き別形態になっていることと，他称詞としてしか使わないことから，世代的な混同を生じることがなくなった結果となる。なお，空欄になっている「対称」については，薛（2000）の「名称を呼称に変換するとき」も参照されたい。

2．言語使用にみる語用論的アプローチ

前節で見てきたように，中国語のテクノミニーである“従児称謂”についての研究は，もともと定型化した名称から始まったものである。後の“従児称謂”研究は主に語用論の観点から，しかも対照研究において行われるようになった。日本語との対照研究では，“従児称謂”という用語こそ使われなかったものの，「視点」と「参照点」の扱い方の日中語の差異を考察する方経民（2001）と“従児称謂”の日中対照をしたうえ，それぞれの文化的解読を試みる劉波（2015）がある。後者の研究では，“従児称謂”を「総合式」と「分析式」との二つに分ける手法が用いられている。総合式とは親族名称のみの形式を言い，分析式とは「子の名前＋他＋親族名称」を言う。同研究では，従児称謂の適用を次の表で説明している(筆者によって原文の中国語を日本語にしている)。

表２　中日両国語言従児称謂的使用情況

		自称		対称		他称	
		基準点人物いる	基準点人物いない	基準点人物いる	基準点人物いない	基準点人物いる	基準点人物いない
中国語	総合式	○	×	×	×	○	×
	分析式	○	○	○	○	○	○
日本語		○	○	○	○	○	○

（出所：劉波2015）

表中の「使用・不使用」の「○・×」は話し相手や発話状況を考慮しない一般論によるものであると考えられる。例えば，日本語の場合，「参照点となる人がその場にいない」場合の「自称」として，参照点となる末っ子がその場にいない場合を想像してみよう。話者が母親の場合，上の子には確かに「お母さん」と自称するであろうが，夫に対して，またさらに祖父母に対しては「お母さん」と自称するだろうか[20)]。一方，中国語となると，「総合式」は話し相手や参照点となる人の年齢などにより，異なってくることも考えられる。「分析式」に至っては，より詳細な検討が必要であろう。

2.1　家族内の“従児称謂”

中国語の家族間の呼称の在り方について，薛（2005）で呼びかけを「話し手基準型」，言及を「話し相手基準型」「話し手基準型」「他者基準型」として，次のように示している。

表３　家族（親族）内における呼びかけと言及の中日対照表

		中国語	日本語
言語形式	呼びかけ	・親族名称 ・名前	親族名称 （ほか，名前，人称詞）
	言　及	・親族名称 ・名前 ・人称代名詞＋親族名称	親族名称 （ほか，名前）
言語使用	呼びかけ	話し手基準型	最年少者基準型
	言　及	・話し相手基準型 ・話し手基準型 ・他者基準型	

（出所：薛鳴2005）

上の表に説明を加えると，呼びかけの「話し手基準型」とは，話し手からみた相手との関係を示す親族名称の呼称語で呼びかけが行われることを言う（もちろん，目上の者に限る）。一方，言及の場合，話し相手の状況によって少し複雑であるため，以下にように具体化する[21)]。

・「話し相手基準型」：　①親族名称　②“ni（第二人称：あなたの）＋親族名称”

①子供が幼児の場合父母や祖父母が話すときに取る形式である。例えば，母親が子供の父親を言及するとき“baba（爸爸）”を使う。話し相手視点からの呼びかけと同型語になる。

②話し相手が幼児より大きい子供の場合，“ni（第二人称：あなたの）＋親族名称”。なお「親族名称」とはその子供から見た関係で用いるであろう親族名称のこと。例えば，①のケースの“baba（爸爸）”は“ni baba（你爸爸）”になる。

・「話し手基準型」：　①名前　②“wo（我。第一人称：わたしの）＋親族名称”

①話し相手が目上の家族。例えば，その家の祖父母に，自分の配偶者を言及する場合が考えられる。言及される人物は話し相手の息子か娘，またはそれぞれの配偶者であることから，この場合の基準は，話し相手視点も考慮に入ることが多い（親が呼びかけに使うであろうニックネームなど）。話し手基準と話し相手基準の融合型と言ってもよい。

②子供が父母や祖父母に話す場合。例えば，幼児期を過ぎた子供が母親に，父親か上のキョウダイを言及する場合．“woba（我爸）”（私のお父さん），“wojie（我姐）”（私のお姉さん）を言う。

・他者基準：　“（子の名前＋）ta（他／她　第三人称：あの子の）＋親族名称”

例えば，祖父母を話し相手に配偶者を言及する場合，「名前」のほかに，自分の子供を基準にし，“taba（他爸）”（「彼／彼女→あの子の」お父さん）のような言及の仕方もある。またはこの名前を付けて，例えば，“小華（他）爸”で言及するような使い方を言う。

以上に見てきたなかで，最後の「他者基準」，すなわち子を介するケースがテクノニミーなる“從児称謂”であり，いわゆる「分析型」なるものである。この型の使用状況を考察する前に，まず，関連する先行研究を見てみることにしよう。

2.2　夫婦間の呼称について

家族間の呼称について考えたとき，まず父母の間の呼称から入ることになろう。それは言ってみれば，夫婦間呼称の問題になる。これについて最近中国では，かなり活発な研究が行われている。例えば，馮莉（2012）〈北方城市夫妻面称調査研究報告〉（「北方都市部における夫婦間の対称詞についての調査報告」―筆者訳。以下中国語論文の題の日本語訳も同）は，調査を通して夫婦間呼称の種類ごとに選択頻度を算出し，場面や発話時の心情との関連性を考察した。なかでは家族内の場合，いかなる場面（夫婦のみ，子供の前，親の前，家族以外の者がいる前）でも氏名（フルネーム）が上位になっているという結果が示されている。厳淑英（2016）〈夫妻称謂語研究〉（「夫婦呼称の研究」），範佳佳（2018）〈哈尔滨地区夫妻称谓的社会语言学研究〉（「ハルピン地区における夫婦呼称の社会言語学的研究」）は，いずれも調査を通して夫婦間の呼称と年齢，性別，職業，学歴などとの関連性を考察した。

それらの研究に共通しているのは子供を介した“從児称謂”の“孩子他爸／妈”（孩子／孩儿：子供）が少数派であったことが挙げられる。馮莉（2012）は，“孩子他爸／妈”が最も夫婦間の情感を捨象した呼び方であるとし，厳淑英（2016）は“孩子他爸／妈”を“次典型的”呼称としている。範佳佳（2018）は男性より女性，若年層より高年層の方が“孩子他爸”で配偶者に呼びかけることが多いと指摘している。一方で，長い間の封建的な考え方の影響で女性は配偶者へ直接な呼びかけの恥じらいから，子供を介した“孩子他爸”の呼びかけ方は現在も農村において見られるという研究も引いている[22)]。それについては薛（2005）も，まだ自由恋愛ではなく結婚する男女が結婚式で初めて会うという状況において，互いに相手を何と呼べばいいかという気まずい状態が，子供が生まれるまで続き，子供が生まれて初めて子を介した呼び方，言及の仕方が確立されるという背景があるとした伍鉄平（1985），黄涛（2002）の指摘に，筆者個人の農村生活の経験により共感し同じ内省を持っている[23)]。

一方，中日対照研究には孙鑫（2012）〈从夫妻称谓语看中日文化差异〉（「夫婦間の呼称から見た中日文化の差異」）や徐虹（2013）〈中日夫妻称谓对比〉（「中日夫婦間呼称の対照研究」）などがあるが，前者では調査を通して“他爸”“他妈”が最下位である結果が示されている。後者では，対称と他称のどちらにも“他爸”，“他妈”は入っているが，一般論的な見地によるものと思われる。また，澤田（2019）では子を介する呼称と言及のテクノニミーの用法を日英中韓四ヵ国語間で詳細な考察を行っている。中国語について言えば，その用法は，呼称語として「極めて普通に使われる」[24)]のかどうか，これまで見てきた研究から呼称

語としての“孩子他爸”“孩子他妈”は一般的とは言えないことがうかがえる。

しかし反面，SNS によるコミュニケーションツールが普及された昨今では，意図的にノスタルジックな言い方をするツイートも見られる。例えば，第一人称にわざわざ“俺”（ǎn）を使う用例が見られる[25)]。《現代漢語詞典》では，“俺”の項目に〈方〉（方言）としたうえ，「人称代名詞」とあるが，北方方言で農村部に見られる使い方であると筆者は内省から見る。それと同様な言語スタイルと思われる“孩子他爸”“孩子他妈”の変種の“他爹”も WeChat の“朋友圈”に見られる。興味深い使い分けが見られたので以下に引用する。

（保持童心六一快乐！……）今天早上宝宝说：“宝宝今天不上幼儿园，爸爸在家休息。” 没人搭理她。竟然看出她爹地今天不上班，在家勤务。估计是看到没换衣服。（2021.6.1 T）

（いつまでも童心を。「六・一」おめでとう！……今朝バウバウが「バウバウ，今日幼稚園に行かないよ。だって，パパがお休みだもの」と言っているが，聞こえていないふりをした。お父さんが在宅勤務で出勤しないと分かったとは！　たぶん着替えをしていないのを見て分かったのだ。）

三歳のお子さんの成長記録としてツイートしたものである。直接引用の“爸爸”は babytalk の延長と考えられるが，後半の言及では“她爹地”を使っている。“爹爹”（diēdie）という畳語の二つ目の音節が“地”（di）に変えられたものである。“爹爹”は前出の辞書に〈方〉，「父親または祖父」とあるが，やはり北方方言であり，“他爸”の方言版であるだけに，よりくだけた言い方になる。これも大学教員のツイートであるが，連絡先にある友人知人に見せるという“朋友圈”の性質から「不特定」ではない「多数」に向けての発信に意図的に自分を遜った使い方と考えられる。自分または身内を遜る効果が生じるとすれば，金水（2003）で指摘された役割語的な使い方に似通う趣がある。

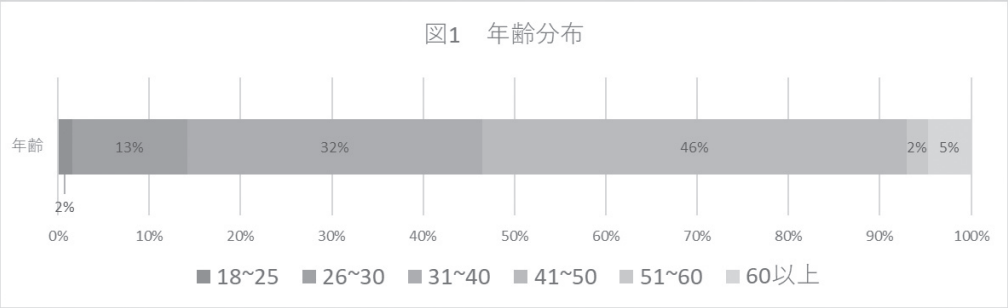
「古臭い」「田舎臭い」とされてきた“（孩子／孩儿）他爸／他妈”類が SNS に再び登場していることを踏まえ，その使用の実態を知るべく，改めて家族内の親族名称の使用状況を調べることにした。

3．アンケート調査からみる使用状況

家族内の親族名称の使用を考察するにあたっては，中国の家族形態の現状から，核家族（父母，子供 1 人～ 2 人）というイメージになろうかと考えられる。祖父母との同居こそ少なくなっているものの，子供の面倒は夫婦双方の親が見るというのが一般的であるため，祖父母とのかかわりが濃いものとして，家族内の呼称を子供，父母，祖父母の三世代間で見てみることとし，アンケート調査を行った[26)]。

調査対象は，小学生～独立する前の子があるケースが多いという一般的な想定から，30

代～50代の既婚者を中心にした。調査開始から約一週間後，129名から回答が集まった。有効回答127名分（男性41名，女性86名）内訳は以下の通りである[27)]。

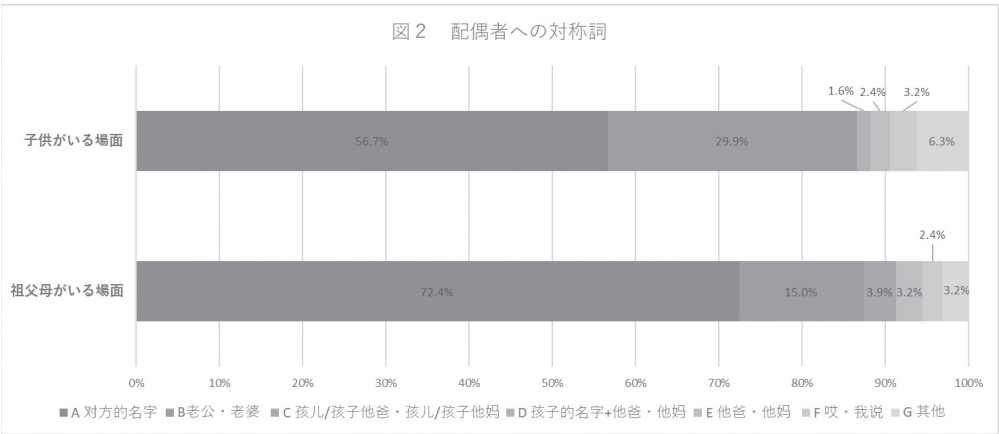


配偶者への呼称は，「呼びかけ」（対称）と「言及」（他称）に分け，さらに対称については子供がいる場面と祖父母がいる場面に，他称については子供に話す場合と祖父母に話す場合にそれぞれ分けて尋ねた。

3.1　配偶者についての呼称語

3.1.1　対称語

配偶者への対称語，すなわち呼びかけはどのように行われているかを調べた。結果は以下の通りである。



【参考にA～Gの日本語訳を記す。なお，発話そのものは“”で囲む。A対方的名字（相手の名前）B“老公・老婆”（「夫・妻」の意）C“孩儿／孩子他爸・孩儿／孩子他妈”（あ

の子のお父さん／お母さん）D孩子的名字＋“他爸・他妈”（子の名前＋“他爸・他妈”）E“他爸・他妈”（彼／彼女のお父さん／お母さん）F“哎・我说”（ねえ…,）G其他（その他）】[28)]

なお，調査では，前掲の薛（2005）の「他者基準」の“（子の名前＋）ta（他／她　第三人称：あの子の）＋親族名称”のヴァリエーションとしてC～Eの三型を提示している。

子供がいる場面：【G「その他」：“小／老”＋姓（各1），姓（1），愛称（1），老头子（1），媳妇（2）亲，亲爱的（1）】（括弧内の数字は人数，以下同）

祖父母がいる場面：【G「その他」：祖父母の前：長女の名前＋爸爸・妈妈；外公外婆の前：名前（1），小＋姓（1），愛称（1），名前＋哥（○○兄ちゃん）（1）】

子供がいる場面，祖父母がいる場面，ともにAが圧倒的に多い結果であるが，「祖父母がいる場面」がより高い使用率を示している。もっとも「名前」と言っても，「姓＋名」のフルネームや「名のみ」（下の名前）やニックネームなどが考えられるが，本稿の主旨ではないので，深く議論しない。夫婦仲や発話時の心情，名前の音節数にもよるなどの諸要素があることは確かである。なお，これについては馮莉（2012）が詳しい。

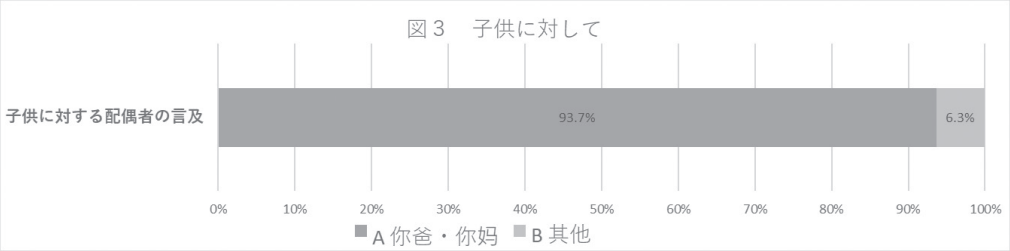
結果から子供がいる場面よりも祖父母がいる場面で名前を使う傾向がより強いことがうかがわれる。これは祖父母が呼ぶであろう名前を選んだ結果だと考えられる。対して“老公”（妻から夫）“老婆”（夫から妻）は，祖父母の前よりも，子供の前の方が多く使用することも見て取れる。このペアの呼称語については，連晓霞・韓梅（2015）〈“老公”“老婆”称谓的社会语言学调查〉（「“老公”“老婆”呼称についての社会言語学的考察」）が詳しい。それによると，近年“愛人”の使用が減っているなか，メディアではドラマやコメディーなどに“老公”“老婆”が登場し，瞬く間に浸透していったが，低俗であるという見方もある。同研究では最も使用しているのは25～45歳に集中している結果であるが，使用理由に「面白い」，「ふざけている」，「甘えている」となっていた。図2を比べてみると「祖父母がいる場面」での使用が「子供がいる場面」の約半数であることが，そこに原因を求めることもできよう。

一方，テクノニミーの「C」，「D」の選択はわずかながら見られたが，子供の前より祖父母もいる場面の方がやや多かった。いずれにせよ，「名前」と「“老公”“老婆”」を合わせた比率は，「子供がいる場面」と「祖父母がいる場面」のどちらも85％強という結果である。また，「その他」に記入された名称を見ると，図2の下に挙げた詳細からA（「名前」）やB（“老公”“老婆”）の変種と見てよい。なかでは，「祖父母がいる場合」のG（その他）に使い分けを詳しく記入された回答が興味深い。直接本人にインタビューしたところ，夫が韓国人のため，夫の両親の前では，韓国の習慣に従って子供（必ず長子）の名前を介する言い方をすると説明された。

3.1.2　他称語

家族に対してどう配偶者を言及するか，すなわちどのような他称語を使用するかを調査したところ，次の結果が得られた。

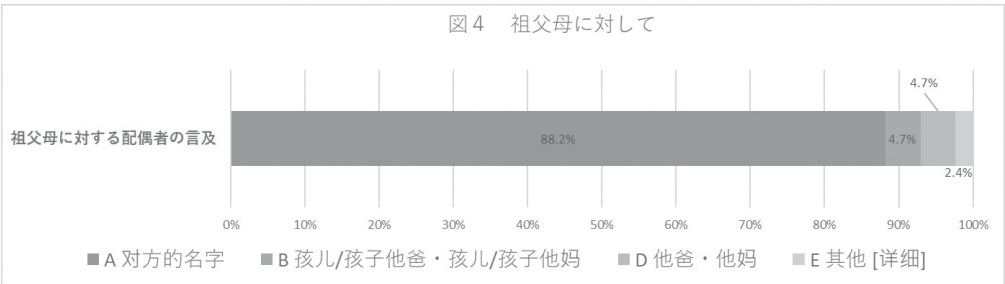
(1) 子供に対して



“你爸，你妈”の選択は93.7％で，残りの6.3％がB「その他」で，記入された内訳は，“妈妈，爸爸”（５）“小＋姓”（１）“我老头”（１）“老公”（１）である（カッコ内の数字は人数を示す）。第二人称を付けない“妈妈，爸爸”は，５人中３人が30代，２人が40代（内１名はアメリカ在住の天津出身者）からの回答である。これらは２で紹介した劉波（2015）の用語を使えば“從児称謂”の「総合式」になり，日本語に最も近い用法であるが，どちらかと言えば「パパ／ママ」に近いニュアンスであると筆者は見る。なお，この場合の最も一般的な“你爸，你妈”（あなたのお父さん・あなたのお母さん）は基準点を話し相手に置き，視点は話し手に置いた結果である[29]。年少者を話し相手に家族を言及するとき，基準点を話し相手に置くのが普通であるが，“小＋姓”，“我老头”，“老公”はいずれも話し手基準に話し手視点の，ユニークな使い方と言えよう。

(2) 祖父母に対して

祖父母に対して自分の配偶者を言及するときに使用する呼称の調査結果を図４に示す。



A“对方的名字”（相手の名前）を使うのが最も多いが，B“孩儿／孩子他爸・孩儿／孩子他妈”，D“他爸・他妈”も見られた。DはBの「子供」の意味の“孩儿／孩子”が省略された形と見て，ともにテクノミニーであり，両者を合わせて1割弱ということになるが，さらに詳しく見ると，Bにおいては男性の方が多いことが分かった。なお，テクノニミーの「子の名前＋他爸・他妈」（C）の選択はなかった。全体ではやはり名前の使用が圧倒的に多かった。

また，E「その他」は3人であった。1人は，3.1.1の「祖父母の前」での対称語において，インタビューした前出の韓国人の夫を持つ回答者であり，同じような使い分けが言及のときにも見られた。あとの回答は，“妈妈”（1），“小＋姓”（1）であった。

3.2　祖父母についての呼称語

3.2.1　対称語

祖父母，すなわち自己または配偶者の父母であるが，直接呼びかけるときの対称語を調べるために，子供がいる場面といない場面において，自己の父母に対して呼びかける場面と配偶者の父母に対して呼びかける場面とをそれぞれ分けて尋ねた。

(1) 子供がいる場面

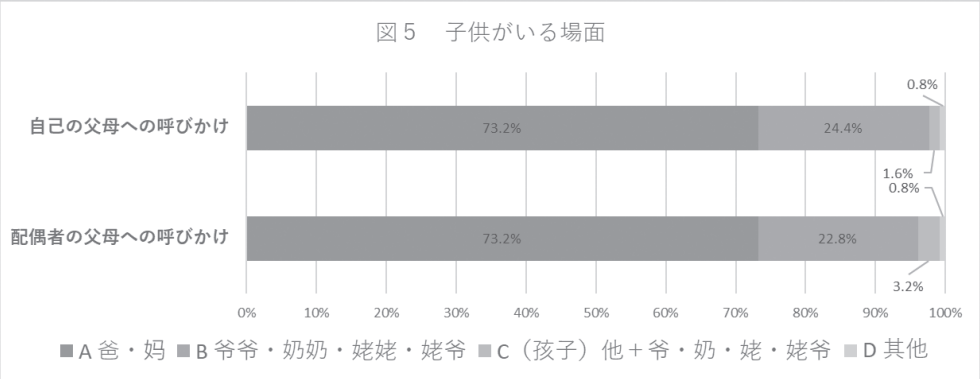
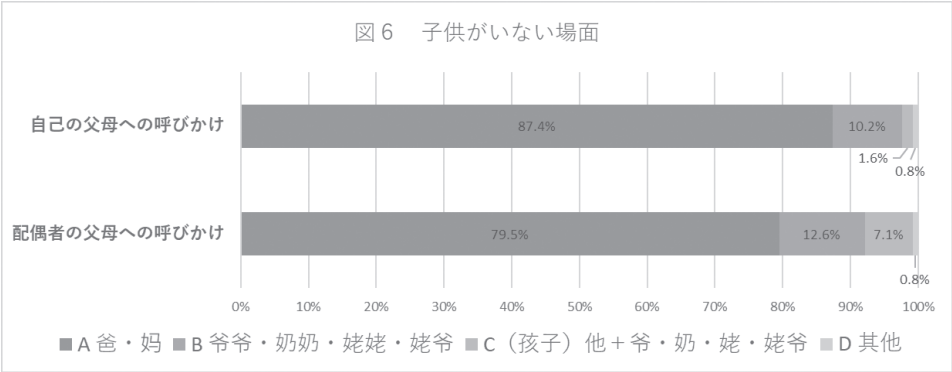


図5から，自己の父母に対しても配偶者の父母に対しても対称語に父母称詞が使用される割合が全く同じであり，子供視点の祖父母称詞が次ぐという結果となった。この祖父母称詞は家族内の日本語の親族名称の使い方と同じであるが，いわゆる“從児称謂”の「総合型」である。また，いわゆる“從児称謂”の「分析型」はわずかで，配偶者の父母に対する使用がやや多めである。D「その他」は自己の父母に“爸，娘”と，母親が“妈”ではなく“娘”

（母親の意）になっているが，Aの父母称詞の変種である（40代男性）。配偶者の父母にゼロ呼称（「直接話し始める」）と記入されるD「その他」の回答があったが（40代女性），詳しく他の項目も見ると，配偶者への対称語もゼロ呼称になっている。ちなみに自己の父母にはAを選択しているが，研究の主旨から家族仲までは詮索しない。

(2) 子供がいない場面

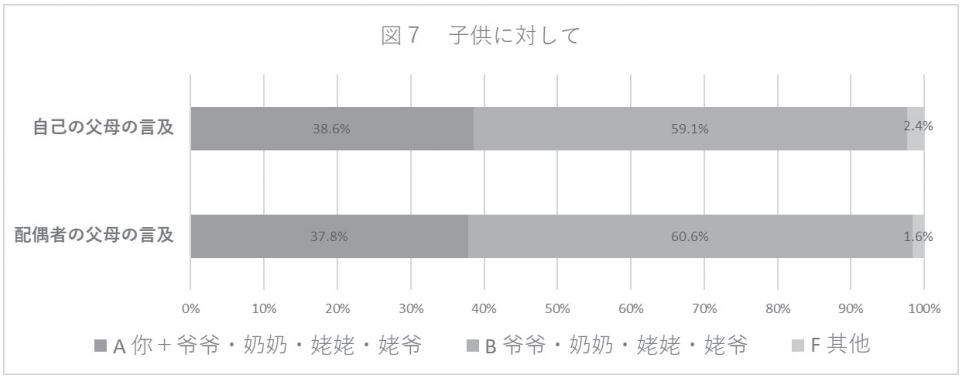


どちらの父母に対しても父母称詞が主流であるが，配偶者の父母に対してはテクノニミーの「総合型」，「分析型」ともに高くなっているが，「分析型」がより顕著に見て取れる。

3.2.2　他称語

祖父母をどう言及するかについて，話し相手を子供の場合と配偶者の場合に分け，さらに後者を「子供がいる場面」と「子供がいない場面」に分けて調査した結果を以下に示す。

(1) 子供に対して



子供に対してどちらの父母の言及も，ほぼ同じ結果であることが図７から見て取れる。F「その他」に「自己の父母の言及」は「ゼロ呼称」（１人）になっているが，「配偶者の父母の言及」は“姥姥，姥爷”の代わりに“外公，外婆”（１人），“你＋阿爷・阿娘”（１人）になっており，回答者が２人とも上海居住の浙江省出身者（女性，それぞれ30代，40代）であることから，南方方言であり，それぞれがＢとＡのヴァリエーションとして考えてよい。3.1.2で論及された子供を話し相手に配偶者を言及する場合の“你爸・你妈”に比べ（図３参照），テクノニミーの「総合型」が圧倒的に高い割合を示しているのが興味深い。

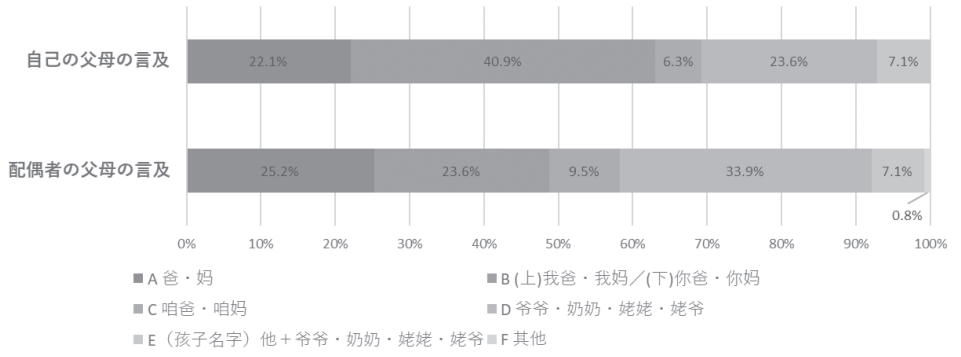
(2) 配偶者に対して

配偶者に対して自己の父母，また配偶者の父母をそれぞれ言及する場合の他称語の使い方について，「子供がいる場面」と「子供がいない場面」に分けて尋ねた。

①子供がいる場面

自己の父母と配偶者の父母，それぞれについての言及の調査結果を下図に示す。

図８　自己の父母＆配偶者の父母の言及



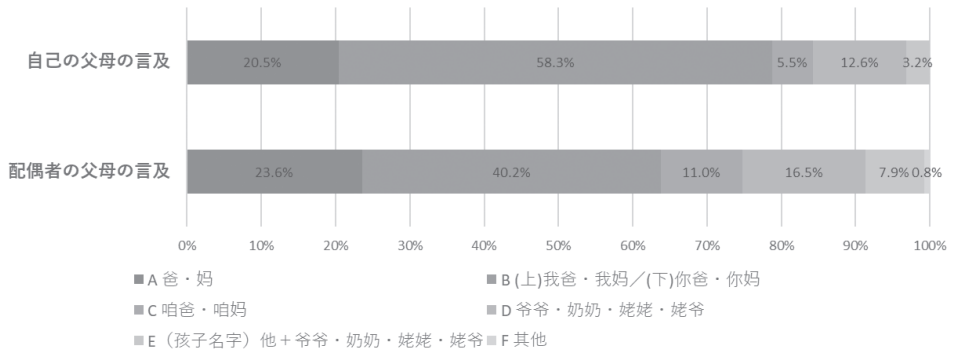
配偶者に対する自己の父母についての言及では，視点，基準ともに話し手に置く「Ｂ」が最も多い。一方，配偶者の父母については，同じような視点の置き方としての「Ｂ」“你爸・你妈”が少なくなっている。話し手視点，聞き手視点を融合した「Ａ」と，「われわれ意識」の“咱”が使われる「Ｃ」の回答は，ともに配偶者の父母についての言及にやや多く見られた。一方で，「Ａ」～「Ｃ」の回答はいずれも視点，基準点が話し手（“你爸・你妈”は話し相手基準とも考えられる）に置かれるものであって，子供に置かれたものではないことが言える。その意味においては同質のものとして，「Ａ」～「Ｃ」の合計を見ると自己の父母は69.3％，配偶者の父母は58.3％で，それぞれ７割弱と６割弱という結果になる。一方，残り

はテクノニミーでDの「総合型」とEの「分析型」で占められ，分析型は両者（自己の父母，配偶者の父母）が同じであるが，総合型は「配偶者の父母」に1割ほど多い。ちょうど「A」～「C」に見られた両者の1割の差と相補分布となっていることは言うまでもない。

②子供がいない場面

自己の父母と配偶者の父母，それぞれについての言及の調査結果を下図に示す。

図9　自己父母＆配偶者の父母の言及



「子供がいる場面」と同じように，子供視点によらない「A」～「C」が変わらず強勢であるばかりか，より顕著に現れた。自己の父母と配偶者の父母それぞれにおける割合は8割強と7割強であり，両者の差は「子供がいる場面」と同じ傾向を示す。その分残りの従児称謂の占める割合は両者とも減っている。子供がいる場面の方が，よりテクノミニーになりやすいと言うことができる。一方，「分析型」（「E」）の回答は「配偶者の父母」については子供がその場にいるいないにかかわらず，それほど変わらないが，「自己の父母」については「子供がいない場面」ではほぼ半減している。「自己の父母」にはより自己の視点と基準になりやすいと言える。

3.3　アンケート調査から分かったこと

まず，基本的には家族間の呼称は対称（呼びかけ），他称（言及）ともに，話し手視点から行われていると言うことができる。「話し手視点」とは，名前，配偶者指示語（“老公／老婆”）はもとより，「人称詞（第一人称から第三人称までの“我／你／他”）＋親族名称」も，人称詞によって先導されるゆえ，視点は話し手にあると言える。“我”で先導された親族名称以外，第二人称“你”，第三人称“他”に先導された親族名称の基準点はそれぞれ話し相手と“他”なる子供に置かれているため，視点と基準点が同一ではない。本稿で問題にして

いるテクノニミーなる従児称謂は「“他”（子の名前も含む）＋親族名称」の類と，ゼロ人称詞の子供基準の親族名称である。便宜上，劉波（2015）に倣い前者を「分析型」，後者を「総合型」としている。ここでアンケート調査の結果を改めて以下にまとめてみる。

（1）夫婦間の対称語は「子供がいる場面」，「祖父母がいる場面」，ともに名前と配偶者指示語（“老公／老婆”）の使用が圧倒的に多い。なかでも祖父母の前では対称語に名前を使う比率がより高くなっている。一方，テクノニミーの分析型はわずかに見られたが，夫婦間の対称語としての父母称詞なるテクノニミーの総合型は皆無であった。
（2）他称語としての配偶者への言及は，子供が話し相手の場合，“你＋爸／妈”が圧倒的に多い。「その他」にテクノニミーの総合型の“爸爸・妈妈”はわずかに見られた。日本語の「パパ／ママ」のニュアンスに近いとは言え，使用場面がはるかに狭められる。一方，祖父母への言及となると「“你”＋祖父母称詞（“爷爷・奶奶・姥姥／外婆・姥爷／外公”）」よりも，テクノニミーの総合型の方がはるかに高い使用率を示している。それは（1）で述べた父母称詞の皆無とは対照的である。総合型のテクノニミーは対等の世代よりも，上の世代についての言及に使いやすいと言えよう。
（3）対称語としての祖父母への呼称は，「子供がいる場面」でも，話し手基準の父母称詞（“爸・妈”）で行われるのが7割強であり，また自己の親と配偶者の親と，ともにほぼ同じ結果である。一方，「子供がいない場面」ではその割合が一層増加し，自己の親となるとさらに顕著に見られた。視点・基準点とも子供に置かれた祖父母称詞（“爷爷・奶奶・姥姥／外婆・姥爷／外公”）は子供がいる場面，いない場面，ともにはるかに低くなってそれに次ぐ。また絶対的な割合としては少ないながらも，「配偶者の父母」への呼称にみられるテクノニミーの分析型（“他＋爷爷・奶奶・姥姥／外婆・姥爷／外公”）の比率が，「自己の父母」の場合の約5倍になっていることは特筆すべきである。
（4）他称語として祖父母への言及は，子供が話し相手の場合は（2）で述べたため，ここでは配偶者が話し相手の場合だけ述べる。話し手・聞き手融合基準（“爸・妈”，“咱爸／咱妈”），話し手基準（“我爸・我妈”），聞き手基準（“你爸・你妈”）による父母称詞の使用は，「子供がいる場面」と「子供がいない場面」のどちらも大半を占めたが，「自己の父母」への言及においてはより顕著に現れた。一方，テクノニミーの総合型（“爷爷・奶奶・姥姥／外婆・姥爷／外公”）は「配偶者の父母」への言及において，より顕著に現れるという相補分布が見られた。ちなみに「子供がいない場面」の分析型（“他＋爷爷・奶奶・姥姥／外婆・姥爷／外公”）は「配偶者の父母」への言及が「自己の父母」への言及に対して約2倍の使用率になっており，呼びかけの対称語の場合と同じ傾向を示している。

以上に見てきたように，家族間の対称語，他称語ともに，テクノミニーはかなり限定的で

あるが，夫婦間よりも祖父母，自己の父母よりも配偶者の父母にかかわる呼称において，より高頻度に使用されると言うことができる。

3.4　テクノニミーに対する意識

調査結果から，テクノニミーの総合型は祖父母への呼びかけと言及にはかなり見られた。これは日本語の家族内における親族名称の使い方に最も近いと言える。一方，夫婦間の呼称にはテクノニミーの総合型の回答は皆無であった。上の世代，ことに配偶者の父母にかかわる呼称は子供に同調した呼称が使用されるという実態がうかがえる。ちなみに少数派のテクノミニーの分析型も配偶者の父母にかかわる呼称には他のケースよりも見られた。

一方，夫婦間の対称語としての“(孩儿）他＋爸・妈”に代表された（「子供の名前＋」も含む）テクノニミーの分析型は少数ながら見られた。子供がいる場面に 5 人，祖父母がいる場面に 9 人で，前者は“(子供の名前）他＋爸・妈”であるのに対して，後者は“(孩儿）他＋爸・妈”であった。そして，他称語として祖父母に配偶者を言及するという設定には11人という結果である。全体に対して少数であるが，その回答で見たケースでは，「子供がいる場面＜祖父母がいる場面＜祖父母への言及」，すなわち，「対称語＜他称語」という使用状況の傾向があると言えよう。回答者全体の男女比は女性が 2 倍強であるという状況を考慮に入れて使用状況をそれぞれの比率で見たところ，子供がいる場面：「女性＞男性」(1.9倍)，祖父母がいる場面：「男性≒女性」(1.04倍)，祖父母に配偶者を言及する場合：「男性＞女性」(2 倍）という結果である。1.2と2.2で論及した古い時代の男女の使用における不均衡とは趣が異なるようである。

調査者の意図が悟られないように，使用の実態を回答してもらったうえで，テクノニミーの分析型の使用と意識に関する設問をした。

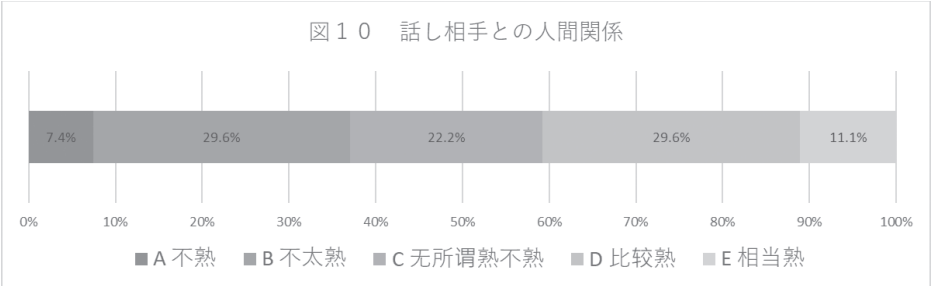
まず，“孩儿他爸・孩儿他妈”について使用したことがあるかどうかについて尋ねたところ，「使用したことがある」は21.3％，「使用したことがない」は78.7％と，使用したことのある人は 2 割程度にとどまっている。各年齢層の使用の有無は下表の通りである。

表４　“孩儿他爸・孩儿他妈”の年齢層ごとの使用

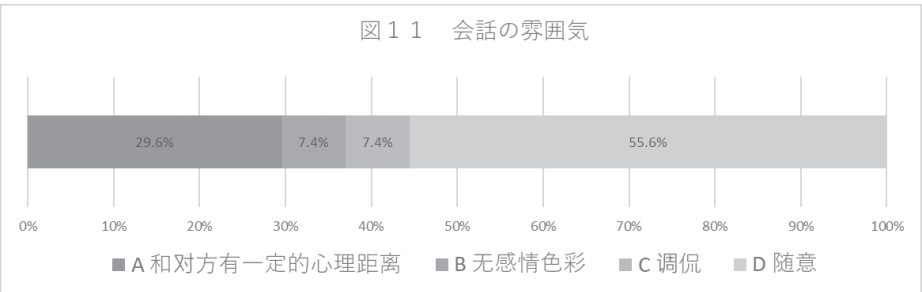
	A 使用过（使用したことがある）	B 没使用过（使用したことがない）	小计（人数）
18~25	1(50%)	1(50%)	2
26~30	2(12.5%)	14(87.5%)	16
31~40	9(22%)	32(78%)	41
41~50	15(25.4%)	44(74.6%)	59
51~60	0(0.00%)	3(100%)	3
61 以上	0(0.00%)	6(100%)	6

もちろんここでの「使用」は家族内にと止まらず，家族以外での使用も含まれた。「使用したことがある」と回答した者にさらに使用する際，話し相手が自己の配偶者についての認知度，話し相手との親疎の度合い，会話時の雰囲気などについて尋ねた。

認知度については，「知っている」は55.6％，「知らない」は44.4％で，知っている方がやや多かったが，決定的な要素ではないように考えられる。話し相手との人間関係と会話時の雰囲気については図10，図11に示す。



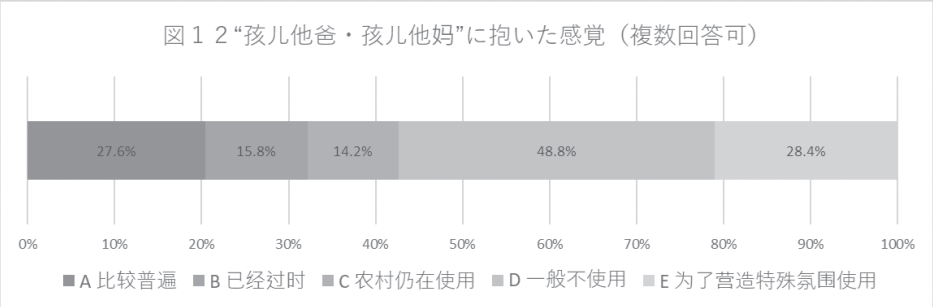
（注：A親しくない，Bあまり親しくない，C何とも言えない，D比較的親しい，E相当親しい）



（注：A話し相手と少し心理的距離がある，B特に感情的色彩がない，Cふざけて言う，D気軽さがある）

最後に“孩儿他爸・孩儿他妈”という使い方をどう思うかについて尋ねた。結果を図12に示す。

全員に複数可で回答してもらったところ，図12の結果が見られた。「ふつうは使わない」は「比較的一般的だ」を倍近く上回っている。とはいえ，先の「使用の有無」で約８割の人が使ったことがないと回答している。なかではさらに詳細に分析したところ，「使用したことがない」と回答した人が「比較的一般的である」を選んでいるのも見られた。自分から進んでは使わないが，小説などでけっこう見るという回答者のコメントと合わせて考えると，実生活では使わないが，全く馴染みのないものでもないという見方もできる。また，「独特



（注：A比較的一般的である，B時代遅れ，C農村ではまだ使用されている，Dふつうは使用しない，E独特な雰囲気を醸し出すため）

な雰囲気を醸し出すため」が次いだ。2.2で挙げたSNSのツイートもそうだが，やはり一種の役割語のような働きをしていると言えよう。

４．アニメ映画の呼称語にみる中国語訳

日本の家族内で一般的に行われる最年少者基準，いわば“従末児称謂”（末っ子に従った呼称／末っ子に従って呼称する）のような使い方は，中国語では，以上の調査から夫婦間の対称語に父母称詞，すなわちテクノニミーの総合型は皆無という結果であった。そこで，日本のドラマに出ているその使い方がどう中国語に訳されているのかについて気になった。この節では，アニメ映画の日中対訳を通して調べたことを記述する。アニメ映画にした理由は，中国で広く知られているもののなかで，いわゆる「家族もの」が探せたためである。『あたしンち』，『クレヨンしんちゃん』，『ちびまる子ちゃん』をテキストとして使った[30]。なお，この用例の収集は統計的な手法を用いず，テクノニミーの総合型がどのように中国語に訳されているかを見るのを目的として，関連の用例のみ見ることとした。

(1) 対称語

妻→夫

①（家族の前で夫に向かって）

母：あら～お父さん気づかなかったの？

　　哎呀！　爸爸你没注意到吗？

　　（『あたしンち』「父，母，モヤモヤ」）

②（家族の前で。ゴキブリが出た場面）

母：お父さんそこ！

老爸！　在那里！
（『新あたしンち』「母，新兵器が好き」）
③（家族そろった居間で）
お母さん／さくらすみれ：お父さんも明日の朝ドアの修理お願いね。
爸爸也是，明天早上修门交给你了。
（『ちびまる子ちゃん』「ヒロシ，熱を出すの巻」）

夫→妻
④（妻だけの場面）
父：何がしたいんだお前は！
你到底想干什么？
（『クレヨンしんちゃん』「お父さん，助けて！」）
⑤（走ってきた妻に向かって）
父：どうした ?!
老婆，出了什么事？
（『クレヨンしんちゃん』「父，母，温泉旅行！」）

父方の祖父→息子の妻
⑥（家族全員がいる居間で）
さくら友蔵：いいや，お母さん。止めないでくれ
没关系妈妈。你就不要阻拦我了
（『ちびまる子ちゃん』「さぬきに行くの巻」）

妻→父方の祖父
⑦（幼児の娘と一緒に祖父をお見送り時）
みさえ：お父さんどうしたんですか？
爸爸你怎么了？
（『クレヨンしんちゃん』「イクじい対決だゾ」）

夫婦間（①～⑤），祖父対息子の妻（⑥），妻対父方の祖父（⑦），それぞれの対称語の用例を挙げた。調べ得た用例のうち，『クレヨンしんちゃん』では，「妻→夫」は「あなた」で，「夫→妻」は「お前」（④）で子供基準によらないことは，「対祖父」の用例⑦からもうかがえる。（ちなみに，「あなた」の中国語訳は“老公”，“親愛的”になっていたが，それ

は，1996上映の山崎豊子原作『大地の子』の第一部に養母が養父（夫）を“他爹”と呼んだのを字幕に「あなた」と出ていたのとは対照的である[31)]。時代と場面との関連で呼称語が選択されていることの好例である。）⑤のゼロ呼称が中国語訳に“老婆”が加わっているのも中国語にみられる呼称語の多用によるものとして考えられる。いずれも中国においても一般的な自己視点と同じようなふるまいを見せている。

一方，①～③は妻から夫の対称語の「お父さん」が，一見そのまま“爸爸”になっているように見えるが，①の“爸爸”の後に第二人称の“你”が付いていることに注目したい。子供基準の“爸爸”に，話し手視点の“你”が付くことによって，発話文の主語の在り処がより明確になってくる。②の呼びかけの“老爸”は近年見られる“老公”，“老婆”同様，本来言及に用いられる他称語が対称語としても使用されるようになったものである（対応して“妈”も“老妈”と呼ぶ）。親しい間柄では苗字に“老”を付けて呼ぶのに通ずるものがあるように考えられる（外国人を“老外”と呼ぶことも同じ発想からと思える）。②と③の父母称詞は日本語の使い方をそのまま中国語訳に反映させたもので，先の調査では見ない用法である。⑥の祖父から息子の妻への対称語である「お母さん」までそのまま中国語に訳されたのも，中国の家庭では実際には見ない用法である。その国の特徴と子供向きという意図が働いているのかもしれない。

（2）他称語

⑧（娘に思い出話をしたとき）

父：お母さんの頭を見ていたなあ

　　都只顾看你妈妈的头发。

　　（『新あたしンち』第24話「父は母のどこが」）

⑨（外出中息子に向けて）

ママ／玉子：そうだわ，パパの会社すぐそこだからついでにお迎えに行きましょう。

　　对了，爸爸的公司就在附近顺便去接他吧。

　　（『ドラえもん』「地下鉄を作っちゃえ」

⑩（夫の仕業と気づいて独り言で）

みさえ：パパだわ！

　　那肯定是公公他。

　　（『クレヨンしんちゃん』「どっちが先に帰るかだゾ」）

⑪（息子に言い聞かせるため）

みさえ：おじいちゃんだって秋田のお仕事があるんだから。

　　爷爷他在秋田还有工作呢。

（同上）

⑫（孫，夫のいる居間で）

父方の祖母／さくらこたけ）：お母さんの淹れるお茶はいつもうまいねぇ。

妈妈泡的茶 可真是很好喝呀。

（『ちびまる子ちゃん』「わたしの生まれた日の巻」）

⑧～⑫の日本語はいずれも子供基準の呼称語が使われている他称語の例である。その中国語訳を見ると，子供に配偶者を言及するときの「“你”＋父母称詞」の⑧，“你”が付かない父母称詞（“爸爸”）の⑨は，いずれも先のアンケート調査でも見られた使い方である。もっとも，⑨の場合，「どちらかと言えば『パパ／ママ』に近いニュアンスである」と3.1.2で述べた見方が裏付けられたとも言えよう。一方の祖母から息子の妻に用いられた「お母さん」がそのまま“妈妈”と訳された⑫はいかにも直訳のきらいがある。中国語のテクノミニーは総合型，「対等とそれ以下の世代よりも上の世代についての言及に使いやすい」といったアンケートの観察に照らし合わせてみた場合，調査では祖父母が話し手という設定はなかったが，一般的な使い方とは言えないと考える。⑩，⑪に至っては，呼称の後に“他”という三人称代名詞が用いられた用法は，①の“爸爸你”と同様，先行した呼称語と同格関係にある。余談だが，⑩の“公公”は「夫の父」という意味で，夫を意味する方言とも考えにくい。日本語の「パパ」をそのまま“爸爸”になるはずだとすれば，誤訳の可能性も考えられる。自己の視点から夫の父親を言うとすれば，「話し手視点」という中国語の親族名称の一般的な使い方がもたらした結果ということになり，筆者の見方が支持されることになるのだが，意味がはっきりしない。それをさておき，テクノニミーの分析型「“他”＋親族名称」ならぬ「親族名称＋“他”／“你”」という用法は，想定外の発見であるが，まさに「子供基準」にして「話者視点」への回帰の表れになろう。

おわりに

本稿は中国語における「テクノニミー」を意味論と語用論の両面から考察した。世代的倒錯が見られる親族名称をテクノニミーの概念の導入による研究をまとめたのは意味論的アプローチによるものであり，アンケート調査を通して親族名称の家族内での使用状況やアニメ映画の日中語対訳を考察したのは語用論的アプローチによるものである。中国語の家族内のテクノニミーを「総合型」と「分析型」に分けて，それぞれの使用状況を観察すると，前者は babytalk か祖父母称にみられるが，後者は対称語より他称語，話し相手が対等以下の世代より上の世代に現れやすいと言うことができる。とはいえ，日本語と比べるとその使い方が

非常に限定的であると言わざるを得ない。一方，分析型である“(孩儿）＋他爸・他妈”の使用実態は容認度との乖離も見られた。それはリアルな場面ではなくメディアを含む文芸作品や SNS など，いわば虚構空間においては馴染みのないものでもないことを意味すると考えられる。また，日本語の「子供（最年少者）基準」の使い方がどのように中国語に訳されているのかについて，アニメ映画の中国語訳を観察した結果，中国語では一般的とは言えないテクノニミー総合型にそのまま直訳された例もある一方，テクノニミーの分析型（「第三人称＋親族名称」）の倒置とも言える「親族名称＋第二人称／第三人称」の形が見られた。この想定外の発見も中国語の親族名称の使い方は話し手視点で行われることに実例がさらに一つ加わることになったと言えよう。

謝辞

本稿の作成にアンケート調査を実施する際，南開大学の梁暁萍先生，北京語言文化大学の李晶波先生，長春中医大学の謝群先生にご協力いただいたことに感謝申し上げます。

注

1）祖父江 他（1987）『文化人類学事典』弘文堂 p. 500〜501 より。
2）鈴木（1998）p. 203 による。
3）鈴木（1973）では血縁関係のない他人に親族名称を使うのを「虚構的用法」とするうえ，家族内の最年少者基準の親族名称の使い方を「第二の虚構的用法」としている。p. 160〜161
4）H. Y. Feng (1936) Teknonymy as a Formative Factor in the Chinese Kinship System. (*American Anthropologist*, Vol. 38, No. 1, pp. 59–66)
5）芮逸夫（1945）「伯叔姨舅姑考」（初出：中央研究院歴史語言研究所集刊六同別録），のちに芮逸夫（1972）『中國民族及其文化論稿』（中）に収録される。ここでは1972年版を参照。また，鈴木（1967）については，同氏（1998）の日本語版を参照。
6）注 4 文献 p. 62 による。
7）銭大昕『恒言録』巻三「親属称謂類」中華書局2019年版 p. 98。日本語訳は筆者による。
8）伍鉄平（1985）の補注に「周知の原因により論文の最終ゲラができた時点で初めて芮（1945）を目にした」となる。なお，著者が目にしたのは《史語所集刊》，第14本，1949年に収録された芮（1945）である。
9）薛鳴（2005）を参照されたい。
10）注 4 文献のタイトルの筆者による日本語訳である。
11）鈴木（1967）が収録される同氏（1998）p. 195 による。
12）伍（1985），p. 245〜247 を参照。
13）銭大昕『恒言録』巻三「親属称謂類」中華書局2019年版 p. 96 による。
14）伍（1985）は“從児称謂”よりも“從夫称謂”の可能性が大きいとし（p. 248），芮（1945）は

“児從親称”（子は親に従って呼称する）として“反從児称謂”であると主張する（1972年版 p. 895～897）。

15）馮漢驥（1941）で，「cross-consin」を“交表親属”と訳し，父親の姉妹と母親の兄弟，即ちそれぞれの異性キョウダイのことである。その“交表”イトコ間に行なわれる婚姻関係を“交表婚”としている。文物出版社1985年版 p. 192による。

16）モルガンの親族名称によりその社会の血縁関係を探る考え方に無理もあるという批判的な見方もあるなか，現れたのがクローバーの分析的分類である。芮（1945）1972年版 p. 905～906

17）伍鉄平（1979）による。なお，同氏はファジイ意味論を中国語に応用させ中国語の“模糊语言学”（ファジイ言語学）を確立させた第一人者である。

18）李晋荃（1997）「汉语亲属称谓和称呼的文化考察」『镇江师专学报社会科学版』1997年第３期 p. 38–44

19）表中の「古代」とは，芮（1945）1972年版 p. 904により「殷」から「漢」までとし，「近現代」とは，前出の「“近代制”（唐末から現在）」の1945年現在にさらに筆者作成時現在とする。

20）澤田（2019）で設定されるＡ型～Ｃ型の四つの類型は対称と他称については詳細な考察が行われている。

21）薛（2005）を踏襲するが，論を進めていくなかで細部の検討をしていく。

22）範佳佳（2018）p. 6による。

23）筆者は文革期に農村下放の経験を持っている。

24）劉（2003）の結論は再検討する必要があると考える。

25）WeChat の「モーメンツ」中国語で“朋友圏”で第一人称にもっぱら“俺”を使う知人が二人観察される。なおいずれも大学教員で性別は男女各１人である。ただし筆者の“朋友圏”による。

26）調査期間：2021年７月29日～2021年８月5，調査方法：アンケート調査ウェブサイト〈問巻星〉によるオンライン形式にて実施。

27）システム上における図１の年齢区分は，日本で一般的に使われる「世代」とは僅かなずれがあるが，論述に用いる「〇〇代」はそれに準ずる。

28）日本語は「パパ／ママ，おやじ／おふくろ」「父ちゃん／母ちゃん」などヴァリエーションに富んでいるが，ここの日本語訳は便宜上「お父さん／お母さん」にしている。

29）方（2001）も参照。

30）利用サイトは以下である。

哔哩哔哩 bilibili　https://www.bilibili.com/

AcFun 弹幕视频网 https://www.acfun.cn/

Amazon.co.jp: プライム・ビデオ : Prime Video　https://www.amazon.co.jp/b/?node=3535604051

Netflix（ネットフリックス）https://www.netflix.com/jp/

31）2021年７月19日からの再放送で観た第一部「父二人」で，戦後混乱期の長春から一家が「チャーズ（卡子）」を出る場面に出た台詞である。

参考文献

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
祖父江 他（1987）『文化人類学事典』弘文堂
鈴木孝夫（1998）『言語文化ノート』大修館書店
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
澤田淳（2019）「親族名称の子供中心的用法の類型と場面，視点――対照語用論的アプローチ」澤田治美・仁田義雄・山梨正明 編『場面と主体性・主観性』pp. 107−159，ひつじ書房
範佳佳（2018）「哈尔滨地区夫妻称谓的社会语言学研究」修士論文　哈尔滨師範大学
方経民（2001）「日汉亲属称谓的语用情景对比研究」『语言教学与研究』2001年第２期，pp. 1−9
馮漢驥（1941）『馮漢驥考古学論文集』文物出版社1985年版
H. Y. Feng（1936）Teknonymy as a Formative Factor in the Chinese Kinship System. *American Anthropologist*, Vol. 38, No. 1
馮莉（2012）「北方城市夫妻面称調査研究報告」『中国社会语言学』2012年第１期，pp. 62−73　商務印書館
黄涛（2002）『语言民俗与中国文化』人民出版社
李晋荃（1997）「汉语亲属称谓和称呼的文化考察」『镇江师专学报社会科学版』1997年第３期，pp. 38−44
連暁霞・韓梅（2015）「“老公”“老婆”称谓的社会语言学调查」『湖南科技大学学报（社会科学版）』第18巻第１期，pp. 142−148
劉柏林（2003）「中日の親族呼称について」『言語と文化』第５号，pp. 61−78　愛知大学語学教育研究室
劉波（2015）「汉日语中的从儿称谓的异同及其文化解读」『沈阳大学学报』（社会科学版）第17巻第１期，pp. 129−132
銭大昕『恒言録』巻三「親属称謂類」中華書局2019年版
芮逸夫（1972）『中國民族及其文化論稿』（中）藝文印書館印行
孙鑫（2012）〈从夫妻称谓语看中日文化差异〉『芸術科技』2012年第３期，第25巻 pp. 74−75
伍鉄平（1985）「论汉语中的从儿称谓和有关现象」『中国语言学报』第二期 pp. 242−258
伍鉄平（1979）「模糊语言初探」『外国语』1979年第４期，pp. 39−44
徐虹（2013）〈中日夫妻称谓对比〉『兰州教育学院学报』Vol. 29 No. 4, pp. 106−107, 113
薛鳴（2000）「親族名称に見られる関係表示――日本語と中国語の比較」社会言語科学会『社会言語科学』第２巻第２号，pp. 43−57
薛鳴（2005）「親族名称と呼称から見る人間関係――日本語と中国語の比較」講座社会言語科学１ 井出祥子 平賀正子編『異文化コミュニケーション』pp. 170−195，ひつじ書房
厳淑英（2016）〈夫妻称謂語研究〉修士論文　江西師範大学文学院
『現代漢語詞典』第７版　商務印書館